



# 伊庭の坂下し祭

## はじめに

観音寺城跡・安土城跡を擁す<sup>きがさ</sup>織山は古代よりこの地域の神体山として仰がれ、数々の歴史の舞台となったところです。標高432mの山頂からゆるやかにくだってゆく稜線の美しさを、貴人に差しかける<sup>きぬがさ</sup>衣笠にたとえたいにしえびとは、さぞ歌心のある人だったことでしょう。

ここで紹介します近江の奇祭として名高い「伊庭の<sup>さか</sup>坂下し祭」は、この織山北支峰の通称伊庭山西斜面にある<sup>きんぼうさん</sup>織峰三神社・<sup>ぼうこ</sup>望湖神社、伊庭集落内の<sup>おほほま</sup>大浜神社を中心に行われるものです。毎月5月3日に<sup>ほつちん</sup>八王子山頂の織峰三神社から白装束で身を清めた若衆たちによって

随所に岩の露出した急斜面を次々と<sup>みこ</sup>御輿がおりされるさまは、まさに祭りのクライマックスといえるでしょう。しかし、この坂下しのシーンは実は祭りのほんの一部であって、その前後には数々の神事が古式ゆかしくとり行われているのです。前年の12月20日の神役定めに始まり、6月3日の<sup>うま</sup>午祭まで実に十六の神事が行われ、これらを総称して伊庭祭とよばれているわけです。

さてそこで、次に祭りの行われる伊庭とその周辺の歴史についてお話ししましょう。

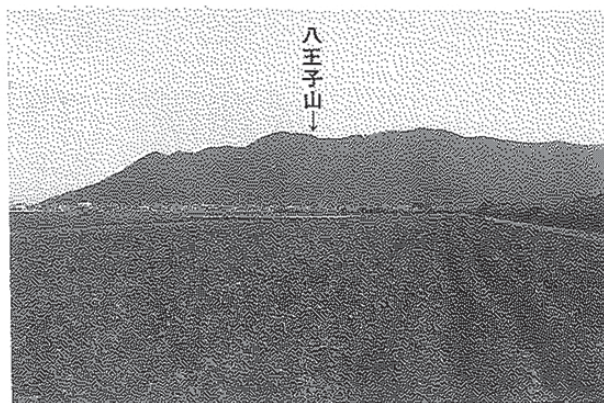
## 伊庭の歴史と伊庭祭

能登川町伊庭は、現在人口約1100余人、戸数337戸を抱えたこの地方有数の大集落です。

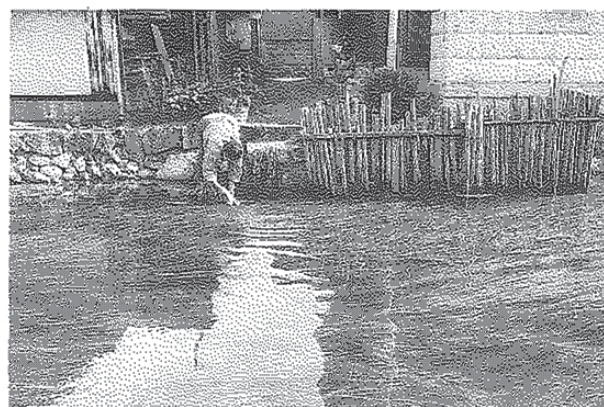


昭和17年の旧村合併以前は、さらに安楽寺・須田も含めた伊庭村として当地に栄えるところでした。四周を廣大肥沃な水田地帯に囲まれ、干拓されるまでは伊庭内湖（大中の湖）の漁業権を掌握し、湖東はおろか湖南・湖西にまで財力のある「伊庭村」の名がとどろいていたようです。

伊庭の歴史をさかのぼると、今から約五千年以上も前の縄文時代から人々が住みついていたようです。その後、今から約二千年前の弥生時代には内湖岸べりの低地に水田を拓いた人々がその痕跡を残しており、自然条件の整った当地で早い時期に農耕集落が生まれていたといえるでしょう。現在の伊庭の名前が文献に現れるのは、鎌倉時代初めの頃に書かれた「保元物語」です。この頃にはすでに水田開発がかなり進行しており、伊庭荘という当地域の中心的な村落に成長していたようです。そしてこの地域を拠点に、近江守護職佐々木氏の重臣として勇名を馳せた伊庭氏の名



伊庭山遠景



水郷の里 川戸端でかぶを洗う婦人

があらわれるのもこの頃からです。伊庭氏の支配は室町時代の終わり頃まで続きますが、伊庭祭成立の背景にはこの中世の動向が大きくかかわっていると思われます。

もう一つ伊庭祭との関係で重要なものは、伊庭山中にたたずんである安楽寺の存在です。安楽寺は天台宗山門派の寺院で比叡山延暦寺とのつながりが深い古刹です。延暦寺といえば、その鎮護神社として高名な坂本の日吉神社でも伊庭祭同様八王子山とよばれる神体山から御輿を下ろす神事が行われています。おそらくこの二者の間には延暦寺を介しての何らかの関連があったものと思われます。織峰三神社は、もと安楽寺の奥の院だったと伝えられるのも興味をひくところです。

さて、その後江戸時代に入ってから伊庭は徳永氏、続いて三枝氏の治めるところとなり村内の諸制度（宮座等）の充実とともに伊庭祭もさらにいっそう盛んに、かつ厳粛に行われるようになったようです。



競饗(くらべきょう)の行われる大浜神社仁王堂



望湖神社、社頭



下しの行われる織峰三神社

### 坂下し以前

それでは、『坂下し』をはさんでその前後に行われる主な行事を見てみましょう。

祭は前年の12月20日ごろに、大浜神社社務所で行われる「神役定め」に始まります。ここでは、正位童・太鼓叩きなどの役を神意によって決定します。祭礼奉仕をする正位童は一般にお稚児さんと呼ばれるもので、神様の代わりとして大切にされるほか、精進することを要求されます。

本祭は5月一番最初の酉の日に行われるのが本来の姿で、この日から25日前の酉の日に、望湖神社で祭に関する打合せをすることになっています。これを「御供和（輪）祭」〔おくわ・おこわ〕といっていますが、現在では4月10日すぎに行われています。先に述べたように祭礼は干支によって実施されていましたが、今は5月のゴールデンウィークに変更されており、この神事の時祭礼日時の変更も報告されることになっています。また、この

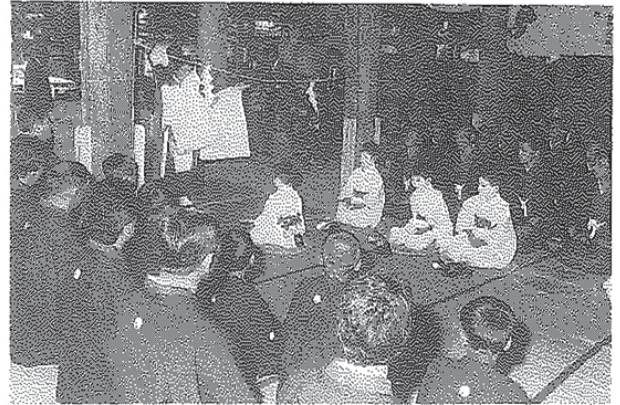


神役定め

日より祭に係る人は精進することになります。

これから5月2日までの間に、御輿からげ綱の点検（綱打ち）・神様に供え物をするための饗づくり・坂下しの道の点検（坂造り）などが氏子総代や保護役の人たちによって進められます。

5月2日になると、「しめたばね」とよばれる清めの神事（修祓式）があります。大浜神社本殿西隣の仁王堂内での正位童の剣またぎのほか、釜鉾前・稚児宿では御祓が実施されます。



しめたばね

そして、2日のもう一つ重要な行事が「おこしあげ」で、翌3日に坂下しする御輿を八王子山山頂の織峰三神社前まで引き上げるものです。おこしあげの順番は二ノ宮・八王子・三ノ宮の順であげ、二ノ宮・三ノ宮は後向きに、八王子は前向きにしてあげられるほか、二本松に飾られる注連縄は二ノ宮に積むなどの決まりがあります。山頂に着いた三基の御輿は綱をかけられ、山頂式をすませれば坂下



綱かけ

しを待つばかりになります。

### 坂下し

いよいよ5月3日は坂下しの日です。太鼓叩きがその始まりを町内に伝え、現在老人憩いの家になっている建物が仮社務所となり、祭の諸役が集まります。そして、行列を整えて坂ノ下に向かいます。これを「出立ち」といい、途中大浜・望湖両神社で神移しが行われます。五人のお稚児さんが大きな傘を差しかけられ肩車ですすんでいる姿は、春の陽気の中で時代絵巻を見ているようでした。しかし、四年前から肩車は廃止され、お稚児さんは手押し車に乗って行列に加わっています。また、肩車以前は馬に乗っていました。

諸役・若衆が山頂に揃い、八王子・二ノ宮・三ノ宮の順に神移しがされたあと、氏子総代・神職に続いて三ノ宮から「宮出し」します。道中には『二本松』をはじめ数個所の難所がありますが、御輿にはそれぞれの位置に先長柄・後見・廻り天・中綱・猿の役割があり、御輿がスムーズに下りるようにしています。無事坂ノ下に到着した三基の御輿は飾り付けをすませ、再び行列を整え大浜神社横の芝原御旅所に向かいます。

芝原御旅所に着いた五基の御輿は仁王堂に納められ、「大饗献供」を待ちます。饗には飾り饗と競饗があり、後者は東西に分かれた若衆がその供献を競うものです。このあと御鏡餅を供えれば一段落です。



競へ饗



祭礼の行列

### 坂下し以後

5月4日は宵宮日にあたり献湯祭・宵宮祭が行われ、若衆は稚児宿に宵宮わたりをします。降神祭と本祭の間の骨休み日といったところです。

5月5日正午より本祭渡御がはじまり、仮社務所前で神事が執り行われます。そして、現在はこれに引き続いて「卯の時祭」に入り、郷頭野の御旅所に向かいます。以前の卯の時祭は文字どおり早朝に行われていました。そして、今のように陸路で郷頭野の御旅所に渡らず、船に御輿を乗せて渡っていました。しかし、いろいろな理由から今の形に変えられました。さて、卯の時祭が終了すると、安楽寺の御旅所へ渡り神事のあと、望湖神社・大浜神社で還御の儀が行われます。そして、最後に傘鉾の前で終了報告をし、祭は一応終わります。

先にも述べたとおり、もともと伊庭祭は5月一番最初の酉の日を本祭日としていましたが、現在はそのとおりに行われてはいませんが、そこで、このことを後世に伝え、昔どおりの日程で祭を行わないことわりを述べるため、5月6日に酉祭を行っています。社会情勢の動きとともに、祭の形が変化するのは仕方がないとしても、昔どおりの祭の形をこのように伝えていくことはとても大切なことだと思います。

(山本 一博氏・植田 文雄氏 提供)  
(中川 真澄氏 写真(一部) 提供)